

名古屋空襲を生き延びて

木野 登喜子さん（昭和 11 年生まれ）

私が住んでいた名古屋市は、戦争当時、軍需工場や飛行場が多く所在し、米軍による攻撃の標的になっていました。しかし、これらの施設は私の自宅のあった名古屋市中心部から離れた場所にあったため、これまで実際に空襲を経験したことはありませんでした。

私が国民学校の 2 年生だった、昭和 20 年 3 月 11 日。その日は日曜日で、3 月にしては暖かい一日でした。私は仲良しのきぬちゃんと人形遊びをして、楽しく過ごしました。その一方で、大人たちは、3 月 9 日に東京で空襲があったといううわさでもちきりになっていました。

当時は日本に不利な情報は報道されなかったため、東京大空襲のことがニュースで大きく取り上げられることはありませんでしたが、人づてにうわさが広まり、大人たちが口々に「飛行機が来て爆弾を落とされたい」と話していたのを覚えています。

その夜遅く、空襲警報のサイレンが鳴り出しました。サイレンは、はじめは警戒警報といって「ウー、ウー、ウー」と途切れ途切れに鳴り、その後、さらに敵機が近づいたときは「ウー」と鳴りっ放しになります。私たち家族は警戒警報を聞くと、自宅の防空壕に避難しました。防空壕と言っても、庭に穴を掘って、階段を付け、上に木の板で蓋をただけ。その中に、両親と私の 3 人がしゃがむと、ぎゅうぎゅうになってしまいました。いつもは、警戒警報が鳴るだけで、それ以上敵機が近づいて来ることはないため、「今夜も上空を通過して、他の場所に行ってしまうだろう」と考えていると、すぐにサイレンが鳴りっ放しになったので、私は慌ててしまいました。

防空壕は通りに面していたため、外の物音がよく聞こえました。しばらくは避難する人たちの足音が聞こえていましたが、やがて聞こえなくなったため、父が「敵機はもう去ったのだろう」と、蓋を開けて外の様子をのぞいたとたん、「逃げろ」と叫びました。周りの家が燃えていたのです。いつも玄関に置いてあった非常用の持ち出し袋を背負うと、母と手をつないで走り出しました。道の両側の家がものすごい勢いで燃えていて、大量の火の粉が舞っていました。このままだと着ている服に火が燃え移ってしまいます。そこで、各家の前に防火用水として大きな桶に水をためてあったのかぶりながら走りましたが、冷たいとか寒いとか感じる間はありませんでした。それどころか、すさまじい炎の熱で、すぐに乾いてしまいます。私たちは、走っては水をかぶり、また走るのを繰り返しました。

いざというときは小学校の校庭に避難すると、前もって決めていましたが、炎と煙に行く手を阻まれて、どちらへ行ったらいいかわかりません。みんな、誰かが「こっちに逃げろ」と叫ぶと、その方向に走り、今度はまた誰かが「こっちはだめだ、あっちに逃げろ」と言うと、その方向に走るというふうに、まさに右往左往して、とにかく火のない場所を探して逃げ回りました。

夜中だというのに、周りは炎と米軍機が落とした照明弾のせいで昼間のように明るかったです。しかし、空は大量の煙に覆われ、飛行機の姿は見えませんでした。その中を焼夷弾が落ちてくるのですから、たまりません。

音も、炎が激しく燃え盛るゴオーツという音以外、何も聞こえませんでした。時折、ポンポンという音が聞こえました。それは、日本軍が地上から、米軍機を狙って高射砲を撃つ音でしたが、弾は全然届いていないようでした。

ようやく小学校の校庭にたどり着いた頃には夜が明けていました。

普段は子どもの足でも 20 分程度で着くところを、5 時間以上も走り回っていた計算になります

が、後で母に聞いてもどこをどう走ったか記憶がないと言っていました。

みんな、すすで汚れて真っ黒な顔をしていました。学校も燃えてしまっていました。私が母に手を引かれてぼんやり立っていると、同じように立ち尽くしている父を見つけました。父は私たちと一緒に避難せずに自宅に残り、バケツで家に水をかけていたのですが、とても間に合わず、家は燃えてしまいました。父は大切にしていたカメラだけは持って逃げて来た、と言いましたが、見せてもらうとそれはカメラではなく、弁当箱でした。父もあまりのことに動転して、少しおかしくなっていたのだと思います。

高級料亭が立ち並ぶ繁華街だったまちは、すっかり変わり果ててしまいました。昨日まで一緒に遊んでいた、親友のきぬちゃんも死んでしまいました。

炎の中を逃げ回った記憶は、長く私を苦しめました。かなり大きくなるまで、空襲の夢をたびたび見ては、うなされるようになったのです。そして、この夢を見るときは、決まっておねしょをするのでした。

私はその日のうちに、名古屋市から遠く離れた、愛知県一宮市の農村部にある、知り合いの家に預けられることになりました。父と母は自宅の焼け跡に戻り、小屋を建てて生活していたのですが、都会で生まれ育った私にとって、初めての田舎暮らしは何もかもが新鮮で、家族と離れてさみしいと思う暇もありませんでした。何と言っても、うれしかったのは、食べる物が豊富にあったこと。遊んでいてお腹がすくと、畑の麦の穂を手でもんでから、口に含み、ガムのようにクチャクチャかんで食べました。今の人たちからしたら、こんなものを食べるのかと驚くかもしれませんが、当時の私たちにとってはごちそうだったのです。

ただ、危険な目にも遭いました。終戦の少し前、昭和20年7月の終わり頃でした。村のはずれの小川で子どもたちだけで魚取りをしていると、上空を米軍の飛行機が10機ほど、飛んでいくのが見えました。恐らく、どこかで爆弾を落とした帰りだったのだと思います。飛行機が私たちの上を通り過ぎた後、背後でシャバシャバシャバ…と水音が聞こえたと思った瞬間、上級生が「逃げろ！」と叫びました。米軍機が1機、引き返して来て、飛行機に付いた銃から、私たちに向けて弾を撃ってきたのです。私たちはとっさに、小川に架かった橋の下に逃げ込みました。ですが、ここも安全ではありません。米軍機がまた方向転換してこちらへ戻ってきたら、今度こそ私たちは撃たれてしまいます。

その瞬間、また上級生が「桑畑へ逃げろ！」と叫びました。私たちはどう走ったのかわかりませんが、とにかく小川の横にあった桑畑の中に逃げ込みました。すると、葉のたくさん茂った枝が、私たちの姿を米軍機から隠してくれたのです。

米軍機は桑畑の上をぐるぐる旋回していましたが、やがてどこかへ行ってしまいました。それからしばらくして、危険を察した村の大人たちが駆けつけて来るまで、私たちは桑の木の幹にしがみついていたわんわん泣いていました。

名古屋空襲の時は、空が大量の煙で覆われて何も見えませんでしたので、私はその時初めて、米軍機を間近に見たことになりました。

80年経った今でもこの体験を思い出してしまいます。空襲の怖さ、爆弾を積んだB29がまとまって飛んで来る爆音や警報の音、燃えさかる炎の色や形、焼ける臭い、一気に広がる炎のごう音など、全身で感じたあの衝撃。今を生きる子どもたちには同じような体験をさせてはいけません。それは大人の責任でもあると思っています。平和を守るためならどんなことでもやります。

(原文のまま掲載しています)